駿臺雜話　五

内閣文庫
和書 類
一一六七三 號
五 冊
二一一 函
一六 架

内閣文庫
番號 和 11673
冊數 5 （ 5 ）
函號 211 240

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

駿臺雑話巻五目録

信集

月無二世の所欣見

遍照の事

詩文の評品

六義の沙汰

多識も貴

曇陽大師

言は身の文

尤物人を移す

離騷の秘事

世をすて身をすてる

倭歌に感興の益あり

作文は読書にあり

文章の盛衰

寸鉄人を殺す

一目の澤

新まなびよう

明治九年購求

壬子試毫の綱 附

駿臺雜話巻五

月を世々の形見

今年もはや半過ぬれば、はじめの秋もたちて、荻吹

かぜも身にしみ、あはれなる比とぞなりぬ。翁も今年は七十にあまりて老ぬれ

ねざめがちに、たゞ夢ぞ見る。されば世の中の人も同じやうに、おのが夕暮に例の今

おもひまゐらする事あり。又もまつてんやとゆふべにゆんとせしが、翁もそゞろにめぐる。今

宵は月ことよし、蘆酒もてなさんとて、遊べやとて、翁の心

を、いかにとかくそしてなぐさめはべらんと名残をしめて、清談の露や

うしかきぬ家人やうやくかくみあつめてよあけまでおもふ

さゝれ波をくゞる。諸客皆盡く興に入りて見えし。其

中にも一人盃を停て、青天有月来幾時、我今停盃一問之と李
白が詩をおもひいづる折、吟じければ、又あるがつけて、人攀明
月不可得、月行却與人相隨といふに、又ある人々追て唱和して皎
如飛鏡臨丹闕、緑煙滅盡清輝發といふに、又其次を但
見宵從海上来、寧知曉向雲間沒、白兎搗藥秋復春、姮
娥孤棲與誰鄰といふに、其次なるは、愁も聊ありて、今人不見
古時月、今月曾經照古人、古人今人若流水、共看明月皆如此、
惟願當歌對酒時、月光長照金樽裏といふに、おそらくは其
後敎歓よりおもひて、或山倒るゝを見て、今さて翁いふやう、
太古より月をもめでしにや、そよと今まで光のかはる事なく

さし侍るさまなり、其まゝつきせぬ千載無窮の感もおこりぬべし、むかし
月を人の花やかなるよりいひ出しけるにや、但月を見るよしいふ事、今宵
出し侍る、是も其時なり、家々八月十五夜の宴を設けり、偶よむ
居るなりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をながめて見て月は
便なしつくづく人々のおもふべき、名を見て月を翫へといふ、又聞しやの人々は上
なおもはんとの切にとも、遠くは長さいの程にもわすれんやなくたらひ
まに金銀しけれど、さてもくやしき、今の世の人も翁もおもはれんやなたに
かかりし、今おもふは世俗月を賞して、光のわかきをこのこと詠めき
よきるやうに良夜といふも、おもふは物喰酒のこゝろにして詠
のものを楽とすれば、かのすき人を語るにおもしろからぬや、又騒人

雲なき月に詠めく。字ある人金碧を雕句として錦繡を裁
すれも風雅を聞ゆるとて。其もなく景氣のうへ淡艶なるも
ありく月のみなる感あれ事をさしてぬかりぬ也。翁のうた千載無窮の
感ならん。我備古人をまさしてらしく。其出をとらみ。其人をまもりして。
常に世を替る恨あるは。月をつかさどる世の此人を照して来て今
に至れば。古人も此月にうるさらむ也。さきに八月に對して青をみひ
うらむさ。さかなくうら古人も此月の面影もかはるもやうに思へ。月をとのいふ
とも語るやうもおもほへ忘れてくるを此し此事をさとるまはりくも
おこらの歌にて。今李白の詩月の高氣をすてて。一氣に古今を洞
觀して。青天有月来幾時と云出たり。氣象のたくましき抜群に

聞へく。詩は豪蕩超逸なるも。みな此詩人の及へき事にあられ
ぬ。よりて李は杜とく杜甫の上に推するも理なりしや作も絶妙なる
李白の詩も。古今流れのおとき我感するとるに。後代を作の人とも見え
ぬ。翁むかし楚辭をよみて。「往者余弗及」「来者吾不聞」といふを見て。
屈子のこゝろをおもしろきる。感じてならん其二句の意は
いまだ屈子一代に知己なきを。かなしみて古人を渺に下の心を待
ことは。わが二度ならず語てとおもふに。其世に及ずるは。かなふれ
又来ん世にさる人ありやあらずや。家とん人を同しうすらめとなしくと甚
人をきけのは。誰ゆゑの志なんとして。それなん屈子ありは限られ。古今心お
ろうえば。大かた此根なきみしをやしれ。翁も此人ふとして月をうかゞ

おほいに感ぜらるゝ也。されば今しも末代の昔ならずとも
はるかの代々までも月に対して今を思ふ人やあらん。月
はさらに其世をも忍ばるゝやうにもおぼえてあはれなり。
月のさまは一つなるものなれど見る人のおもひによりてかはる。
月見る事は末代までも愛でらるゝ事なれば、人ねがはしく
極まりなきをしるべし。翁の月に於ても窮せし感ありといへど、諸君
芳へ思ひあへ。いかさま面白き事なり。

離騒の秘事

往昔の聞て屈子が心をとりて月見んとなす。世にあはれとききしは
今の世に翁なる事を屈子がはかりしらぬ処を遺恨がましく思ふなる事也者

は吾不聞と。いはれしは誠にさもありなんとて、はかりかたき月見は
わが心さへなくて屈子が心をとらんとて。離騒の文をとくは
中さんきよらかなる所。諸君なにとぞ天下の幸ならんや耳
をそばだて居ければ、さて翁楚辞は離騒を第一とす。屈子は周の
末に生れ楚王に仕へて忠臣なりしが、讒を蒙りて放たれ
志は小人の讒を信じ其忠を退けて、故にかなしみて
と怨みるもの國をうれへ俗をなげき憂ひ、作る事を作れり。
一篇の文の主意は屈子が同族にして世卿の家に生れて
才を潔くし行を脩めて以て君に奉せんと思ひしが、一國の讒をうけ
しみだれ朝に放たれて志を得ざる事を。衆芳を佩て奇服を

好よ香草を託し給ふ。かくうるはしくすなほなるも讒にあひて去
のんきえこまりえまじきはさしこえてあしくとも。時俗に去る云
くらいかたをゆるしき。蘭蕙とくしやを糸し。此芳草に生ふるおしれ
とめよわん変じ分れとごさまりて今ちる主とく。讒臣国を危う
すれと是聞もらす八くも尽し。ある国へもさしきまし申し。おゐへとぞきまれ六つ
ちなきわくしまはするよ是ひと。文園の人ならまし八。故郷に思ひものつくられ。
よしさる尺、汨水こふみり投しかちとしいふかなく為さむれれちかや。微う
嘆くのん。匪躬の忠言わよ溢きくちるを攘へ。神をきゆらぬるなか
ゑぐへし。さまあき一元ときまて此章かき六今文いやま及えれ。但離騒
のあらまと、いちくる淵源わるつたふく本よ振われつあらく。太切のと務

許くれわるに。是をきる此離騒は秘本とれ。其秘本といふからもおのまお屋
わらえ多く、篇端の数語よあまり。帝高陽之苗裔兮。朕皇考曰ニ伯
庸一といひ出しえんくえ、いうやくみえへし。是本ヲ身を思ひわるるわるわ
然え又六朝の士太史公つ世よ仁ありき。月本が武士の王孫を名るとは。
其んなうち乳名が本のおめるを入とともそれとおくれ。親を
忘らくんがらし。乗からうも揺くちく人ふらも崩くて秩うし。屈子され
こう生祖為しく名多くさく家よ甘すま。父於は、おもきわかをうけのみら。
いうよ又を申ちさん生祖をえのうし。むきかく思ひけかくしまかか。
くいひあきしろといかくわくるまいある。其功よ皇覽揆ニ余于初度一
兮。肇錫ニ余以ニ嘉名一。名ニ余曰ニ正則一兮。字ニ余曰ニ霊均一といひ。又沙く

紛吾既有此内美兮又重之以脩能とあるをもて自贊すれ
ばく屈子みづからもいへり。其自贊のことばに父が我を大事に
おもひて。嘉名を名つけ。脩能を授けに。かく。教育する所は。
かくせしおのれがさしてなりといふとも。君を起し國を
憂るの志をもて。忠孝を思ふ仁孝の心をしらして其德おもく深
きなり。其甚皦然たる一のなく。死にいたるまで仁をなす孝子
と爲たの事をすれども己がことをわすれずして其德なりけ
るはおほくさしおく。屈子忠盡の事をいふにわたくしと志る人多
く屈子死して二千載に及ひぬるとも離騷をよむ人其辞との説
て。一篇此の人はなほ雜るを云として事実にくはしく離騷

をよむ人て此書に世を得しのみ。所謂にいふ屈子が知己として。そ
のはかるを述る中にも又ことにかなしきはなれさる秘事とひ
しるしを得しがかくして今志る世にものしれる多く至るとし
てゆるす事を識なるは。いくらく人さへ知ることなくして遊ぶも
いのちなれ秘事のあやしくありけるしに。諸君此書を得く容易なる
事をなき縁ひとといふ尺。諸君。翁のひとむすぶといふ。古より離騷
をよむ人すくなきこと。先儒が論も語にあるを深くしは。鄭案しにき
讀たるもの生くいふひかくぬ事なれ翁がひ。翁の此説をさらに
さらにまさに共君一夜語勝讀十年書といふかたりの事あれ
ば一句さかんに名よ後しひるがへしき。

遍照（へんぜう）が黒（くろ）かみ

翁又いはく、父母を人のよろしくおもふ事は、人窮（きう）してハ、父母をおもふこころ、天性にして自然の職なり。古より人孝子なる、常には父母をおもひ、人を先と民職なりて、父母の名をわすれかねて報ず。おほかたにはむくい果（はた）し、報ずれバ、父母の恥を除（のぞ）かん事をおそれて、もとより忠をつくし、ことさらに孝を百行（ひやくかう）の本とする故にこそ、ここに八屈子（くつし）讒（ざん）にあひて、父祖をおもひ出でて、その名を忘れぬの根ざし深き事を知るべし。うし良岑（よしみね）の宗貞（むねさだ）、深草の帝におくれまゐらせて、俄に出家し、僧正遍照となりしその遍照が歌にさへ、父母を思ひこそ。

たらちねはかゝれとてしもうば玉の我くろかみはなでずて、すやありけんとて、仏に帰（き）して世を捨（すつ）るとも、そのきはにわすれて、ハ父母をおもひ出られなく、天性に父母を忘れて仁に背ひざる故にあらはれたる所なり。今の親をすて子をすてて出家するも、真の道に入るとすれど、ともかなしくおもひ出す事の人の性を戕賊（しやうぞく）するといはれしも、なほ忘れぬ心あるゆへし。唐古今の賢人宗貞にも一代の寵臣（てうしん）、其人物（じんぶつ）のおもく、まさに国の法（てん）をあらはせしに、これも名卿世系（めいけいせいけい）の家にうまれ、ついにその父母およんぞの事なく国を憂く、身をうしなふやうにいやしかりし事をしらず。今身窮して、つひに離騒（りそう）を作りて、父祖をおもひ、つひに倭歌（わか）を詠して、父母をおもふ心をあらはすとも、君子にあらず哉とぞ

固く雖して死して家聲を墜さしめば。我父祖にかけし名をも
はづかしめ侍なかんいふも。宗身を亡すときて世代の主を抹殺
の義をなさしむるものなれば。然ればみなとして髪をわけねるのに
すべしといへり。然されば遍照が歌をみるべしとしのぞよ侍
るまじきなり。

然ればまた其かくのかなくすべし。志をかするもなきとそれを知らんもの
甚だ多し。彼が徒をしきりに世家の功徳なく父母も成佛する様。
髪をおろすは父母の報恩とすべしといふ者やあらん。それはと
佛説に惑くて天理に背すまじ。今またなすとさばく告なきやう
なし。責ていふべからん

然らばちかひの世をすつれば。身をもすくえぬ。そのかみは
あはれなるかな。源平盛衰記とよみ侍りしに。頼朝敵にわれ
るまじく悔し。其究に後まで。おそらしき敵にさらさすまじとて。すでに
自殺に及んとする時。髪の中に佛の小像をゆひ添しを首を敵
に渡さんは大将軍のあるまじき事なりといひてきざんでくづくのごとき
事なかくし。おもふことなきにいたる心しを公ける事は人にそむ
きことあるをや。佛教の中にも後生をまつるとおそる。丈
夫の志をもとをあかれねはしなで思ひるは。さしもたの
もしと思ひける佛をとりてあまりたのもしくえねかくれそ
あはれなれとて人ある羞悪の心を同有すべしといふ事なり。

さるほど遍照ハ父母を思ひつゝ。わかきなりしかど志しなかりしかバ。から
うじて頼朝ハ敵に志て勝て。天下を志ろしめすなれバ。仏う
無縁の所にまも率て出家せさせつべし。
世をすてゝ身をすてゝ
さるに今ハ遍照ハ世をすつれども。なからふかと思ひ出して。菩
心も定まらず起りてまた。所縁に定く侍る。古への簪纓家の出家
する者ども。父母の事など思ひ出されバなかなか。信認のあやふきと
まれ類よ。子なれバ人ときハその中。遍照の歌を見れバさ
うき世の外にあらへて。ききなれしや。ある人ハ后の行もよ。
なかぬと苔の袂。かゝる身をせよ。君を志て出家なさけぬかし。

それより家の居にまさりて。なにしろか家をわしおき
むく。またさ紙筆の代ならばこそ。さて遍照ハ後中にありけるが
わかる事ぞ。行脚の序に鎌倉を過ぎしに。霧雨ありて雅楽の律
に調ぶる音しけるを。其人ハ此按察なるかな。頼朝やがて見
とがめて。営中に請じ。弓馬倭歌の事などとひ給ふに。かの山鶴々
初めは物語もなかりしが。思ひ直りて此物語らふにして。営中に
作りし三浦和田をそのしめ其外の群傑とも人なきほどに思ひ
それハ頼朝もさてハ事をめぐらし思ひをはげめども拘留せられ見えう
もなく。海を引出て抱なりける。むかし河津にも同じく。爺にあはし
狼の猪を狩りし其時。出る時道の馬にわかひあふ。

見れはさらに世くさとも知らね。其後はきこえらく。ぬらくらひ音もせざりしが。
其名は高雄の文覚といひし豪猛の悪僧。鎌倉の将を
かたらひて叡門に威を振ひしが。南より人となりてあくまでをしへ
まことしやかにあひなれば。よのわざもをしへめんとていひしに。或時
ありける雄といふもの来りしに。けれは文覚に宿をそかし
これ文覚をよりて問ひけるに。其後寺にいひけるに。妙なる人に参り
月之行ありて待ちけるに。拳を握りて待けるに。貴子とも来
る者をかくして。其はなしに思ひしに。文覚あるを一目見て気を
奪ひまゐらせしと居続して。後貝に貴子ともいはずとて云蒙
中に鎖をなさずとて。文覚彼の源となりしのを見て銭を

うれしきことのかなしといひけるが心よく其人にこの高閣に
して気魄精神あくまでおしはかるを知らし。あまた情をいき
は。儒者世に伝ふることの多し。かゝる人おほきも真の道を志さん。
其竹貝の名明なるを大きに世をいとひて浮屠に帰するもの
し伯者とすて釈氏によりて仏に帰して。衆生をすくはんとせし
むく。あとへするは世をば捨まじきも。其人の君父をすて身を捨
すべく身をすて世を捨ずしては世をすてるといふべき。世をすつ
あるべく名利を得るも世をすてて極楽を得るも清濁はかはらざる
の楽を思ふも同じこと。それより仏の教も人倫を捨て
八。君父をすてるはあしきこと。これにならふも捨るべからず

一にはみな此業をはなれてすてぬ。名利にまよひまはりて見ぬやうし。世と此
うみに生まれ名教中に自然の楽地ありて。何ぞ必しも人
倫をすて。事物を離るべき。人倫をすて事物を離れてはぬ。已う
往生極楽を祈るの世をすてたれとて。いよいよ身をすてても
証なく。楽欲をはなれずともいふべし。或人ハ郷里
にあはれなる婦人あり。夫にはなれて月来哀慕し。其緒も絶
ぬれはそのかたはらに其子をも夢みて憂くいはしいはさむしきもきこえし
に。只かの仏法をきき。ますます信心おこし。婦人にいひければ。夫を
あはれみ念仏申しても。仏法に惑けとなられ。又しまよひける。
男女の道も多くあるもさるべく。只なくなりあはれなるべく。豪気此

なるあはれかなしむ。かなしむ心おもしろまして。なほれて私欲此
まよひ生て。大なる罪障を増長すし。その心をようく分別して
なげききくよしも。さとしし此婦人忽にさとりぬ。の画して
よりなげきなからまほしけれども。人情をまよはず此僧婦人を教論せし
ハ。職にかなひて其身もとも。其身も同じおくなられて身をまよはされ。ハ
昔よりの仏を尊する人。貴賤男女をいはず。其身の苦楽をもたらふ
よりも起らねハなし。此哲の人をいはず。此婦人の見悟にも及ばぬなり。
あはれ人材をむなしくして。既にうく世をすつる。事此代々に
さそあるものをなのみとなく。空のみなりつめらまし。

宇宙依然百代流。道喪文弊思悠悠。誰知天上孤輪月長

照人間萬古愁。

詩書道廢共誰陳。邪説紛々日競新。明月似知千載恨。

慇懃來照白頭人。

翁自ら此詩を誦して口すさひ給ひける所に諸生も傍へ侍しけるに月落河傾て。夜も既にふけ行けれは各いとま申てまかりぬ。

詩文の評品

他日諸生集会せしに。各疑問事有て。詩文の評を乞ふ。いはまは翁は申さく。詩文は学問の餘事なれは。急務にはあらす。されとも藝に遊ふの類にやあるへきさまは公翁の詩文の編を求めらるゝとて八翁先詩の事を論して。諸生に百篇ほとを示して旅すれは

及ひ漢魏の後の詩は。文理悠暢。意思淵永にして。風雅の趣を失はさりしなり。蕭統か文選に載する古詩十九首。並に樂府歌行の詩をよみて知るへし。其のちに六朝にいたりて。綺靡をきそひ浮華を尚ひしかは。風雅の體をうしなひにけり。唐興て李杜王孟ら出て。六朝の餘習を一洗し。古風を振興せしより。今にいたる詩を学ふ人は唐詩を宗とせさるはなし。盛唐の詩は古をさる事遠からす。風象を学し人情をよまるに於ては風雅の残膏剰馥あり。これを其の外の人を感するもの有れは。学ふ者性情を吟詠するには唐詩も捨へからさる也。宋の司馬温公杜甫か國破山河在。城春草木深。感時花濺涙。恨別鳥驚心といへる詩

を論して。古人此詩を意在言外を貴ふ。山河ありと云ふは餘物なき事也。草木深と云ふは人なき事を見せし。花鳥は平時楽む人もなくて。さびしき風を戦しめば。当時流離の情いたりて見ゆ。又明の王鏊か唐詩を論ずやうく。固而緑衣燕々頃人乖離等の篇は情をも言外に窮の感ありて後世多く唐人の作るに此さわ。渓水悠々春自来やと云ふは懐友といふことはなくて。懐友の意言外に溢る。潮打空城寂寞回と云ふは寂亡といふことはなくて。寂亡の感言外に溢る。凡人此體を得るを要す。此二字の論ふかく古詩を得るをやうく得る。是も唐詩の妙を見るべし。李白か大原早

秋を賦して。霜威出塞早。雲色渡河秋。夢繞辺城月。心飛故国楼といへる類は詩に雄壮の気をふくみて見ゆ。杜甫か江亭を賦して。水流心不競。雲在意倶遅。寂々春将晩。欣々物自私といへる類は詩に深遠の意をふくみて見えたり。又王維か日落江湖白。潮来天地青といひ。杜甫か呉楚東南坼。乾坤日夜浮といひ。孟浩然か微雲淡河漢。疎雨滴梧桐といひ。柳宗元か壁空残月曙。門掩候虫秋といふ類は雖の洞をふくみ不群の思を発せり。又宋人のいたく形状の多きを写して目前にあらはす。畫は意を含てあらはれぬを是とす。是も此の例として知るべし。杜甫

の秋興の八首。王昌齢の官詞は諸家にて。其體にて、それぞれ名あるも。各其絶を称せるのみにして。ひとり傑出するものなかりしが其中唐より下は晩唐にいたりて。韋蘇州柳儀曹の如きは。昌黎の文章古今に卓絶すといへども。其詩は雅中にありて遠からず。されど孟郊賈島の寒痩。元稹の軽浮。白居の浅俗。李商隠の僻澀。温庭筠の媚艶いづれも詩の厄といふべし。其他なほ晩唐にいたるもあまたあれど。其大槩を論ずれば定めて趣劇なく。品格卑くしてすこぶる其作れる者もたゞ声律に拘て。窠臼に落て詩性情を吟詠するものは少なし。然るにも。鄭谷の雪を賦して。江上晩来堪畫處漁人披得一簑帰と作るを東坡の評して

これ八村学究の詩なりといひしく。柳子厚が作りし千山鳥飛絶萬逕人蹤滅。孤舟簑笠翁。獨釣寒江雪といふ詩をば。別格のものといへり。鄭谷の詩は巧にして俗耳に入り易ければ。子厚の詩をもて見れば。その鄙俗なることしれて。おほよそこれ東坡の眼力よりたいきを知るべし。されば僧志南が思ふは。細雨湿衣看不見。閑花落地聴無聲といへるは。盧綸の詩の人口に膾炙してけるをなん称しとよくいひおほせたり。されど。吟詠すれば餘味なし。宋の僧志南が。沾衣欲湿杏花雨。吹面不寒楊柳風といへるは。清麗閑暇唱ありて味わひ盧の詩中にはるかにまされりとぞ。志南の詩を朱文公の称ぜしも宜なりといふべし。其の擊壌集をよみて

て。梧桐月向懐中照。楊柳風来面上吹といふをもつて見るべし。文一等
従容は和歌にあらで。有るは云ふとて其上も。物に風流人豪
とゆへるし。此之人の作句。調景題ともに桐似て。あたらしき之作よきあ
え作る。處は辞をすゝむし。志南康節は情をすゝめして。情に殺
あるは云ふを多く詩を遊ぶ。新しき辞に拘る。理屈に落て味なく。情を殺
志をいたく意思を含みて味わふ。志の至れるなし。物事は人。辞は雅俗を
志に作りてみなこれは情は如此中を及ぼすし。今世好く詩を賦する
人を見るに多くは句を綴り唐詩をまねしくよりは志しなくなくさと
出るものに。己の俗膳のまどろむちよいふ流出作るは。巧かなるは。疏龍を
きくに似ることも。拙き作を。禅深をよむに似るも。文世に一種偏曲無

實は此人にあらず。たゞ其名をしるのみにて。楽府古詩の辞を剽掠して
己か名に傲る。己の表流の外一代に誇るもしらず。たとへば郷を出て
をよむに。猥辞流靡一向に文理をなさず作序岸はおそく斷梗は
あらし。文字は怪といふとも志の称は甚黨の人を桐師視しくせ
る文雅風流をし。わまさく聖人の道をも文雅風流なる物を近
うしときく作れ。文雅風流をもしてまたせよ。道をも文雅風流なる
物なく。いはれたゞ。いふかなるは。まさにあるを。されさへにて俗人あまて節
まかくせ。告げれ猶ほ。さうして道は仁義中にあらずして。詩歌愛
絵にあるよな。志あるは八孔之とあるを世は騒客俗人の了き道まくを
けあ。今まで志しさるまゝにて。いとは猶ることは知れやすかるに。いはかなるへ

翁ハ戯なる事。とかくよろしき詩文を好み。華飾をもととするハ道に違
かなきことハいふまでもなく人の心術を害すれバなり。古より義
やまと詩とむかしき事はさて置ても。凡仮一句も詩歌を作りて風雅の
趣を忘るべからず。質撲に野なる方がやすからん。

倭歌の感真の益ある事

さき凡我翁は歌あるをもしらず。唐にある詩ありのあしきを。よみて
詩歌ともに同じからずとして。一首も出さず。我翁今はしかしながら作る
みしるの文辞まうける。李杜諸名家の詩をよむ人あるなれど
読ても其の意に無しからしられぬ。白居易詩和の如く倭歌
の風をかなひ。平易にして無しやまとの詞に近きを唐詩の上等

やして当ありて長慶集をのこさむ。いかなれば其詩ハ
膚浅根作にして見る者ハ懐風藻本朝文粋なども蒸
知らずして又我家又山老福の状すれ絶句の體は一種濃淡也
味ありて近き事にて。我翁其詩をすて論すれ
事なるを思じて倭歌をよくして。我翁其人かたまりて性情を
吟詠するをこのむやすみて詞に。いまとなる所の下へ、かざる人のいふ詩や
一首ならぬ詞むかしより只に戯にして。曲尽人情をうまへ。それより三十一字
此不及にきこえ此ぞ翁やの盛時の盛唐の詩を好みて読て貫至
の早朝大明宮の詩に。千條弱柳垂青瑣。百囀流鴬遶建章。剣
佩聲隨玉墀歩。衣冠身惹御爐香と賦して。其意をしりて王維

につ九天閶闔開宮殿。萬國衣冠拝冕旒。日色纔臨仙掌動
香煙欲傍袞龍浮と賦し。岑参が金闕曉鐘開萬戸。玉階仙
仗擁千官。花迎劍佩星初落。柳拂旌旗露未乾と賦し。杜甫
が旌旗日暖龍蛇動。宮殿風微燕雀高。朝罷香煙攜滿袖
詩成珠玉在揮毫と誦すると見えたり。文彩の煥赫なる事はこよなけれ
共風流の気象目中にあらはるゝ事はかゝる下にありて。倭歌の風
情ぞ。殆蛍燭の日にあけるがことしと思ひ得るものゝ情にぞ争る一好
しハ。あのはかる詩よりかの字わかるゝ人ぞ都に首のをきてみよかれ。
周風芣苢の詩に。采々芣苢。薄言采之。采々芣苢。薄言有之と
いふうたうたし。是ハ婦人のあつまりて采々日を都くなど月、うち

咏しかれかむし。もかおいおもしき婦しもかのやうにて。其時代泰平なれ
婦人まで安き事を知る事をしれるに。其時楽まわれたまふぞさう也でう泊て
是しも其大家人をいふ。我はれや。これとてれ、かさしきにるらも
そうし侍こよみ女學我部も処書舌譯おりて侍りき。胡姫和字譯
只閑眠なるの事。ちをうひやもとまかくりや感嘆し。芣苢の鏑り
よくいかなれ得る哥。古今集の歌を詠まれたるよ形はわろく
おりしも一唱三歎するなるなる
とくかるさくに浮んならにもののあそうにわらたゆのまさる秋もある
ひて。此歌を吟まるには。老人の懐旧の情を感せられし。
花の形のやさしあやか。梅の花のちらしなどつきて……

かゝるゆへ此歌を吟ずる人ハ有徳の奇特の儀を感ずべし。

世中にさらぬわかれのなくもがな千世もといのる人の子のため。

此歌を吟ずる人ハ孝子の親の恩を感ずべし。

風ふけバ沖つ白浪たつた山よはにや君がひとりこゆらん。

此歌を吟ずる人ハ貞婦の思ひ夫の情を感ずべし

忘れてハ夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見んとハ。此歌を吟ずる人ハ君子不忘故旧の情を感ずべし。此歌をよまもなき我等ごときも古今集以後八代集までくはしくわけて撰ばるゝ中に人の常に好みて吟ずる哥一首あり。鎌倉三代実朝の歌に。

武士の矢なみつくろふこての上に霰たばしる那須の篠原

此歌を吟ずる人ハ家を辞して鬼をも引く體なくいさましくして歌に勇壮をあらくすまする哥也。かやうに此體の歌おほく見え侍らず。金なる人常に此歌をよみて世にて金葉をあつむるにもの志を感じて勇氣をましてしきりに思ひ侍るべくさらにあき秋のおそろしき我此月おもふ我縁めし歌もなく吾心にうかび侍らで、さながらやうにおぼえなきにおなじく、ふしぎなり、かの網ひきたくらよるいひかなへぬるを見ゆる人ハ感嘆のあまりしてすでに今の世出ける歌数首をあげて例していはく。

又かくれたる光のうけきたちの月に。

朝日かげ。にほへる山ざくら花。いさぎよくもおもしろきおもかげなれ。
うちしめやかに。わかやぎたる月の。やさしきは。やさしきの多き音。
遊の面をもちて。かなしき夕霞のうちにさまけなす。あはれ。月下飛。
夕さりぞ。つまの。いかなれ。おもひより。かはし。みちよる。秋風吹。
秋風にかなしき。雲の。おもかげなりと。月の影のさやけさ。
津の国の難波の春。あしの葉も。風情あり。
詩とやく。詩は。もろこしに似たり。佐野の。ことにもいふ声。
又其ほか。歌に其音の気質ありて。さながらの月によれる。まことに。
えたる。折にのべて。心を述べて。襟懐を清くし。塵想も去ん。
西行の如き。法師は。倭歌に深くすゝみ。しかれども。さもありなん。

いひもてはやされし。詠をあらはし。性情をあらはす中にて。あはれをしる事なかるべきかは。
されば倭歌のもとはかくしてよこのありさまを。住吉の神の詠をおもふ。
まことにいつくしき一帰。おもしろき事なれば。さてあはれなる趣の。いづくにしきこえ
るゝ。わざとめきたるは。いかで久の人の感長する詠は。さらにきこえも
晩唐の後の詩のみなく調よりことにかはり。情はとても文字をしらね
なれども。かの文字も風俗の衰へにつれて。浮靡になりゆきて。実をと
りうしなへば。なげきしことなれ。詩は古のことに隠れけるとぞ。

六義の沙汰

座中にて。純実なる古今集の序に。歌のさまをむつにわかてりけり。
かの六義の中にかく撰み給ひきと云は。詩の六義に基きたるなりけり。

取てよきをいふには、和歌・倭詩の事にもあるなり。詩には六義、古今
集の序にいひけるは、いくつの趣かならむ。たゞことに、[illegible]
風雅頌賦比興をもつて六義となる。風とは諸国にわたりて、いはゆる男女各己
が情を詠ずるの詩なり。國々にて甚風體もそろはず、風なりといふなり。雅
は朝廷の公卿大夫以下、己が情を詠ずる詩なり。聲正しく體いやしからぬ
を雅といふなり。頌とは宗廟にたいして、祖考をほめ、福祚を禱る
詩なり。是を頌なりといふなり。これらを詩の全體とすべきなり。六義[illegible]
物の名[illegible]なれば、是を三經といふ。さて賦比興の三を
[illegible]三經を指すにあらず、風雅頌の詩の[illegible]賦比興の三の體
[illegible]織物の[illegible]なるごとくなれば、是を三緯と

なり。三經三緯を合せて六義とす。三經は前にいふごとく、詩の部立なり。
三緯は格別の事なり。三緯は毎章詩の仕立やうの事なり。賦とは葛覃
巻耳なとの詩のごとく、情をすぐに詠ずるをいふなり。比とは[illegible]
は、あらはしき體をもいはずして、他物をかりてその物を比喩する也。
宮人螽斯羽を詠じて、螽斯の多子なるをかりて、后妃の子孫多きに比し、
婦人柏舟を賦して、柏舟の漂流するをかりて、己が夫にすてられたるを
比するのたぐひ。[illegible]別に[illegible]及ぼし、
興を他物をもつて[illegible]。関雎の詩の関々たる雎鳩
ごとく、窈窕たる淑女を興し、樛木の詩の樛木の葛藟をもつて君子の
福履をいひ起すのたぐひ。よつて[illegible]、今詩の六

義なるべし。倭歌を編するに万葉集よりはじめての方ハ風雅いふに及
ばず。さて其外古今以下代々の歌。多くして輦轂のもとにあつまる。是を雅と
いふハ園秀桑門の作。又ハ恋釈教等の歌にあらずしよ。雅といふべからず。
神祇慶賀の歌なりとも其意風て頌に近しといふとも。是又宗
廟楽歌の趣と異なれバ其體又別なり。然れバ風雅頌の三ハ倭歌に
ハきくべからず。されバ下いひし三ハ先をかし。倭歌の部立を定むべき。然
ば其の三を。倭歌の體とするにハ是ハ爰に言はんとさしおきて古今一
代集の歌共のうちにすべて風景を詠じ。情事をのべ。此其すがたを稀
なるに。今よりハ九を然といふも。中より此其體をもつばらとしたる也。
仁徳帝の御即位を賀すべし。

難波津にさくやこの花。冬ごもりいまハはるべとさくや
この花とよめる。采女の御前のさかつきを取て。采宮にたはふれむす
なんとしければ。其事をやめて。浅香の王を饗せし事をよみたりし。
大和紀てさかゆく月のきよければ。其六雲がくれ浄きも。訳を受けるに
とよめり。かつ其歌の趣世をおさめゆたかなる事をおもひなげきて
おほわらきの東西の下ず。おこりぬる詠もすぐれ。万人ゆなすし
とよみたれバ朝廷をなぐさめ作りて。雅頌なる事をあらはされ。実
頌の風をも。詩のごとく。是ハ其の體にかなへる。人丸の古今かなのし
くわんこうのしらべなれバ。
是実の心をも尾ハ。もつて尾のなりかゝりし事なり

経ざまれば類のおほし。語多く一片真なれども。いのちとかよへば
上の句に山鳥の尾をたらして起して切れても下の句にわたらず。其
外世の人はあはれ詠に目のうら痛く花にほひあかなけれど。
あしては雅俗をはなれて。やさしき詠がらくも錦も花にほれ
このわのとよみたん。義理の世にをとみえてならずといふてなし。
あし鬼のさたなく入江に寄る汐の世にすさみたれど。我身なり
なきやはよむれば上の句に下の句をそらしいひおろして。下の句
みなく切れて我いふは侍する真の體にかはりたる。されば和歌六
をふくめる風雅頌の三つも。賦比興の體もさらにあらはれ其之
いふる六義は詩の六義を添へて参く歌のさたをいくさなりけく。

詩の六義とかぞへ義をもて解く。かくいふならむ。さるに八詩の六義を詩
の六義なりのかは歌の六義と捨列に見えしは。わきまへ撰すべけれ。倭
歌に傍ふ官職律令等の事なくも見ゆべく。衆的なく漢唐を旅
なかく建るる事に。名擬って名実齟齬する事多き。伝の筋を
倭書とこく人多き誤く牽合して。其誤を信とせられ居らくは
公道にわるれる。信以傳信。疑以傳疑といふにもとるなれ。ただ非のまゝ
はまに添すれて我明達の輪なるをいふべきなり。

作文を讀書にわかつ

後數日あらそて清き事今古しかすまにさもあれく。前月倭歌唐詩の
事をはしく寒を無聊をわけ給ふ。但倭歌に。我等あるときのかはりて

学ぶべき事にあらず。必しも自らよむにも及ばず。詩も必しも自ら
作らずとも古詩を吟詠しても襟懐をきよくするに足るなり。ただ文
章は人の意を述ぶる物なれば、今聖賢の書をよむにも文辞に
よりて求る事なれば、文辞の法にくらくしては、其蘊に至らせ
ざるのことなれば、其義を誤る事もおほかるべし。其上孔子も辞は達
すればのみと仰られば、自身に文辞をよくして書を解し、義理を論じ
ゆかば、其法をおぼえして、たゞ理をいひ達する事になほかくべからず。
今我等がたとへき此晩進後生文章を学ぶ者に、かしこくよくある
べくもなく、翁等がむかし浩瀚をつのむ人此の如きを
きゝて、是を捕ふるとは、志く

拙き文をかりし語を物とせず。其初手にすゝむ事からの大事なりと志
多の人々は、まづ語をも読まずして、作りは難しとせしなり。淮南の首
をよくよみなし、わが意に於ては常に学びて志す。其後学に
継ゆくよき文辞文を好むゆゑ、是を多く此年月を費し終りぬ。今に
くやしき事には、あらひすべきや七十にあまりて、生ずれども、されば月に
ろ此すまゝに、よき世にめぐりても、是に法をよくおしへゆゑ、わが意
よりては親しくおしへ語り、詩文をはじめ文章を文にせし語り、思ひ得たる翁
がいはくまことにや、義理は物を掘りて出でる。義理の主使は我
邦此人たくもかつよおしえ、あやまちあらず、宋明諸儒此語
をもあつめて是非し、其の及ぶ所も学ぶ事を要するぞなかれ

たゞ文辞をまなぶものハ常に叙事の文をかくべし書をも國語を
よく熟し。顚倒してよめる人事をつくらバ。老師宿儒といふとも。よく辞
をおぼえて述する事難からん。況や多くを涉獵をつとめて。書
をよむ事も雜駁なるハ。かくの文辞の妙なる味をおぼえず。己れよりて
自から作る文章も辞なだらかなる事を塞て。或ハ奇險を務め。或ハ怪
僻に涉て。自から古文辞と称して世に傲るまゝあるべし。太のみてに作る
事なくハ世の人ハ富商大賈の己が貨財多きに誇りて。簪纓家
の風流を真似するの類ならし。珍奇名器あまたつらねて飾たつるに似
たらしく似たる事のあるまじき。かの如きを見て其家の達なる
事に味を知らずハやなどやしきを見ずて其迴にあらハ文ロ吃

すれハ人のこと葉をかへするにおなじ。されバ古より文を作るにもとむ
る事を。古文家流の名をいふて世に行ハる事なりし。今此弊を矯む
やうやく漢唐以来の諸家の文を読て。其中に文法をさとるを志
とすべし。其能く風をとりて。まづ賈誼が治安の疏。董仲舒が対策
の文韓退之が原道。欧陽永叔が朋党論の篇を最とす。其外柳
子厚三蘇王曽がごとく。古今大家と称する人の文章を見るべし。平易
條暢なるをよしとするなり。漢以上ハ今人の好める弇州滄溟の文などに詰
異難渋なる事やあれバ文ハ韓柳欧蘇をまなび。詩ハ李杜王孟なるべき
とし。さて元宋明諸家の文章を論ずるも。韓柳欧蘇を宗とせざるハ
八なし。論る諸家の文章を論ずれバ皆迂遠にして初学に益なし。

章法句法抑揚頓挫なとやうの仕法に熟して後此事なる也。
むかし孫莘老欧陽公と相識なりし。或時公に問して文字ハ
いかに問しに欧公此にこたへ、作文無他術、唯讀書多則為之自工、世人
之患在懶讀書、又作文字少、毎一篇出即求過人、如此少有至者、
疵病不必待人指摘、多作自能見之といへり。欧陽公此言平
實にして味あり。文章を学ぶものゝ大切なる事なり。為楽の
文章に於て書して何そや捷徑もあらんことく求して後に文
を学ぶもの別に協此法なし。多く讀書にあるへし。欧陽公此言我を欺
かさるなり。欧陽公古今文章の大家にして其言かくのごとく。其
上古人の為にいへるものなるへし。

先に述ぶ。又昔より作法に泥まずして作りけし。又韓退之答李翊
書、柳子厚答韋中立書、并に蘇老泉か上欧陽内翰書などを見るへく
知るへし。此子ハ皆古の著作の事を述て猶ほ此力を讀書に
尽しけれハ、讀書に労して著作に及せて、其かたよりよ節
をわかちあるへし。されハ韓柳欧蘇の文章におけるも天授は
材といふへし。されと讀書の功によるもの多し。今吾黨の学文、文
辞を学ふもの必しも文章家を学ふにあらすとも、常に書
に辞を学ひてすへからく古文辞をよみならひて
此後躁進せすして久しく潜思讀書に心を尽し、
常に筆を著作にして自ら文を作り、師友の指摘を求む

よのまゝよしや思ふ事し。さられや指摘の益ある。大體文字程よげなりとて
中よ一二字の疵病をあらため。又は彼於古於此とする我りて不かた。今率易
よりて不成體の文字よくく見て求むるを去るハ不可也のとし。
結構深造を言ハ材木器る倫を言ひ或ハ堂を建かし宮を築かし。
或ハ株を擦らし椽を棟とせハ一句よ位居をうつせんとも。其大匠と
いふべきこゝろ修補すへきこそや。多く字を定むべき。傾をよく見るよくあらてやます
まし。今後生此文字を指摘するも亦かくのおとくし。爾よおふくなる者
益あらん。其の故よ余のいて後生よいくく。先学をすすんて其の作
の功を讀よをもられく。古文辞よ覃思せよ。久しくして必古人の氣
よおもき古人の作をよく咀嚼まるほかうと。しかうして時く参揚

すらも一字の託しありとて先儒も之ハ著作を一句よ廢せらるるよ
もあられ。作するよ七八の力をは諳よとゝめ。二三の力を作るよ用ゆへし。
かくして月を経年を経ハ。韓柳欧蘇のやうたるもそのかくとも損益
よ悟る所あるて。文字を作るよ熟し筆活しく意ありて
涵く自ら成るへし。悟晩じしてえせ。遠くりしてそ大きなる傷也。

多銭善賈

座中此語あり。文章此字を讀書を要とすれとも、ほしく取るは
まつハ文章此為よ多く為るき書をいのかくよ。見てけれハ之ハ鈍
きうし。韓退之の進学解よ。規をさきて作を擬するの書とのふ。
上姚姒よあって下太史所録子雲相如よ至る。柳子厚の章中立

に答ふる書よりはじめ諸書を首として太史公に及べり。二子は漢室
と班固以下を取て是を見るべし。さて是を韓退之の答李翊
書には三代両漢の書にあらざれば敢て観ずとあれどわきまへ西漢書を八
すてさりとて欧陽東坡等の書をよむは唐人の事にて大古今に
書によるべからず。八家の内にも欧陽は韓文を学び。東坡は孟子を学
ぶといへり。多読共切に心をつけて後の人のつきて便に作す
るなれば。名は左伝によりて南豊陳無己は伯夷伝を悪て作学
けれど後山王臣を悲しむに文法によらざるもの多し。古人多くかくのごとし。今
伯夷伝をよみたる人あらし。されば文法を得んや。是やもさきれ
帰化の人の舜の永楽之喩の由をまさに東坡穎濱などの如き後は文老泉

かのまゝ常に一書を枕中よりはなさず。深く秘して見
せざりしとぞ。父がその時に初めて之を見たりしに孟子なりしとぞ。
此事かの書にも見えたり。されど甚だ世に流布せし本ときこえ
老泉の批点孟子とて世に伝はるものも甚だ偽なり。さればこれ八
さとわきまへぬも。老泉も用ひられし秦両漢の書を見てまれに孟子
を讀み熟くよく精しくかく見て漢籍をよくしまさば多銭に貫長
独若舜といふなく文章も多読にてはあるまじ。但し秦両漢の
書はなくとも巻帙浩繁にて。吾徒の材力にてはおよびがたし。左伝
このみ読むべし。是よりはやくは公羊穀梁を読むべく。公孫龍子類の句読に
く。老荘屈宋の他。淮南荀卿の書。さて左丘明の國語左伝。司馬

遷が史記。班固が西漢書に極めつくして其中より唐宋大家の文を熟読すべし。それも全集をよむ事ハおびたゞしき事なれバ茅鹿門が編集せられたる八大家の文をよく会得すべし。八大家の文をよく会得せバ自然と文章の道に明らかなるべし。明朝諸家の文ハ古書の字をかりて體裁を装ひ出さし。新奇をも旨とする者多し。奇怪相競ひ獻異をも施すまた甚しきハ文字を知らぬ説を施して二三の冗を施し。それハ文章の綱なかりて。さる事ハ義理濂洛関閩よりして。文章を韓柳欧蘇よりして見るべからず。是より後世儒者の道を尊ぶ事ハ宋儒に在し。今の世の宿儒を称する人。己が鹿浅猥瑣の文をもて。みだりに韓欧の文を非毀するよしはるゝ。ちりの蟷螂が轍に向ふごとく。韓ハなかなか及ばれず。欧陽ハ

文辞を解せねバ事と従るときハ。おのづから。むかし韓退之文を作るに人よりよく人。然れども人ハ事を作る。文ハおよそ儒人の言ふ所のまゝを書たるものにハ無し。老子も下ニ原道大要ハ尽く「不足以為道」とかきて見るべし。然ルに人ハ及ばずく。つゞく韓欧の文ハ尊ぶべき事也。然ルに人ハ嘗てハ韓欧をするに程朱も程朱を攘ると思ひあやまつべからず。いかにぞなすべきも。已が学ぶ事あるのミにて。古人を然らずとすべし。学者のこゝろを後世に貽さんやうに其道を持すべき也。

文章の盛衰

文章を論ずるに。古今の文章を論ずるに。西漢の文章ハ奏疏

制策なり。賈誼か過秦論。司馬遷か答任安書。司馬相如か諭
巴蜀檄。楊雄か解嘲。皆類ひなく優れし。其文大抵雄偉高邁後人の及ふへ
からさりし。東漢以後文章衰弊して振されハ。期に及て六
朝駢偶を主とせしかハ。規摸窮盡し。氣象萎薾して。然るに猶
そのなほ近し唐に至りて其弊ありて除きさるに。韓退之柳子厚出
二子ハ。法度も超絶の材をもて。一生の力を盡し。古今の文を陶鎔して自
このら機杼をなし給ひ。其文上迫西漢く。弥遠くなとなし。東
坡か韓文公の碑に文起八代之衰。道濟天下之溺と云し。道濟天
下之溺ハ知らす。文起八代之衰と云ハ異論なき事也。此二子の後に
といふべき。其後五代を歴て漸く衰へしを。欧陽東坡の二子相継ておこ

振起せしかハ。文章はふたゝひ古に復しぬ。其文光明正大。又追
配韓柳くは蓋さらにし。元をもて事に韓柳欧蘇を文章家とし
大家とす。古今文章におゐては一人も服従するものなきなり。
さるに明朝に至て。朝に文士多くありて。文章世に盛なりし中。劉基
宋濂李夢陽何景明の徒名を一時に擅にし。大家の称をもして
韓柳欧蘇の文におよふ者ハ一人も雖
尚しく餘脈しけし。其外文章をもて唐順之王慎中
の徒各一家の名を立といへとも。法度ハ韓柳か遺流なり。欧蘇
か餘波を揚る者なれハ。然るに文章ハ時運と盛衰する物なれハ。
明の中葉よりも以後稍く衰へて清に至て平易なるハ鄙俚となりぬ。簡

古なれども剽竊とやうなるものにて、文章科挙帖括のためなる
故に是を時文と称せしなり。古文をよみならふさる事にかなはざるなり。
此時に逆ふて古文に志ある人世に少なからずして、後古矯俗を意にかけて
韓柳欧蘇の文をしたひ亦儀とせしが、篇中にも揄揚し句々みな
藻せられたるなり。其の如きと材識すぐれたるは、蘊畜深くありける。か
くて其の古代の文をよみたるは古に似て古にあらず。雅に似て雅にあらず。最
後に李攀龍王世貞なども其の平易なる、膚浅なるをいとひて
桐巣の奇怪の文を造作し、好んで佶屈を唱へ洸洋自恣にして
一世を鼓動せしかば、当時の文士靡然として追随せしかば、号して文
章の盟主と称しき。我邦の滄溟鳳洲は常に韓柳欧蘇の文を

衰と称して終に邪径なる事ときめ、鳳洲も晩衰になりて文変ると文
を論じて甚後悔して、平生になすことなき事も及びなしとける
よし。銭謙益が列朝詩集に見えしと覚へ侍る。其の頃より今文章を
よくする人の作者の王氏の集作を捨て、彼が四部稿を作る
事は左と見へぬ。又文鳳洲のみならず、又韓欧を毀るものゝ
意得がたき空言くさき事を、おのれ小のわらはんやの小見
にくき事を述べき事なり。

曇陽大師

今の文者を新しきやうにしておもふ事あれども、一義理の大筋を
考へるときは今をふるきに似たる事を今世の儒者きりてなるに

は義理ならぬものやあれ何をいふまじきなりて。さまで杜撰ならく
ありけれバ。此世に腐儒と称する人にも。義理に節ならざる人も
見え侍る。孔子も君子は義以為質也。行ふまじく候ふ。一君子の云ひ
のとやく行ふ直ちに言ずべくよく行ひの事。義理を質実とせざるハなし。
いはんや文章ハ質ありその文なきハ。義理よりなれバ。作りてハ浮靡
孔雑なりて文章ならず。しかれバさきに韓柳欧蘇の七人に浅まで
文章科中の人なるハ其深き理を有る人と作しおさめて
も義理の餘なる人中ながら作り韓欧ともにありよしとせらしかれ
一代の正人なるべし。抄ぬらし。柳蘇をかくして。釈氏に浸漫し。
そまでに柳ハ叔文が党に入り。蘇ハ洛党と仇となる。たゞ是をもて正人

とすべからずあるに貶黜せらる。それは学術正しからねばなり。今文苑凡
すれば文をとる人も必ず義理に根拠して。識高く思ひ深し。
中に柳が文は精深雅健なり。気格高くして雄抜しければ。蘇は二人に
議論振発し。汪洋明豊にして。確乎として抜くべからざれども
て韓欧に配して愧ざるなれば。明朝にいたりても。弘治正徳の
頃よりは文章といへば義理をすてゝせざるを文体の妙とし。己が博
聞に傲りて文辞に馳騁して。義理をすてゝ世の文を好みて
その辞を矯飾して。文彩目を驚かし。変幻百出すといへども明眼
の人一たび読めば浮浅にして見るに足らざるを知るべし。滄溟
風州等の文をよむに。義理のうすく二子は為人を考ふるに。軽率浮躁

みして、是も義理をまもりける八とゝろ気ならずによりて父家の義理
に本法くなきすゝまされんか今その大概をつゝきけれど、二十にて莫逆の
交をなし、日東徴逐して詞賦をよくして桐湊中原二十をとよて自
から許さるゝ所の顛狂恣雎にふるまひしなれど、程なくして鳳洲
この父王忬怨家のために誣られて下獄論死せらるゝ。この時鳳洲
弟世懋と同じく棄官して長安にきたり、父の死に代らんとてひし
このとき、かなはざりしかば號泣悲跳して柩を負て帰葬しければ
世の人これを六ばかりの事をなしたるがましかればとて見しかぞまよふ人も
不安なれど、かなしきけれども又も滄溟も病中に暴卒せしかバ、謔
浪笑敖の友もなくなりし程に志氣沮喪しければ忽に故態を

変じて釈氏に帰依し伽藍を建立し、又弇州北園をひらきて日
々賓客と其中に宴游し、歳月を消遣しければなほ此をまもりしかわ
たゞしへきハ社友王錫爵の女は丘尼となりて、恬澹教門をたてしを、
鳳洲これが弟子となりて、其尼をそして曇陽大師と號し、錫
爵と同じく紡盧戒食し、それより賓客を謝し、筆硯をやき、
朝夕梵誦をのみ勤めければ、みな希有なりとおどろきしもさまに
も無理せぬ志にして嗜好を忘れしまはりそれ。又如く詩人酒客
の間にあそびしが程なく身まかりしゆゑ、名望ありし鳳洲の為
人を考ふるに病狂喪心の人に似たり。然ども博聞宏詞名を竊む
に至り、同時の名流衆を収めるにあたりては、其時に当て地をなし

なるき游道ハ歷き海内の人物を鼓動せしかハ、至る所に良知の説ならく天下を傾けし後ハ、さきのさる所なつかしく、世の論者陽明を並へ称して一代の盛事なりし。其後ハおとく陸く明朝の学中に二つの流義理の学と陽明の学と。文章の学中の風列に宋儒の倡良知の説と内権存合の工夫に係く。儒者分内の事を離れ風列にひかれて名換をこととひ規矩を破りて多く文雅風流をこととする事ハその害晋の清談に似てかなしきことあらし也。今世師儒と称しては孔子を称すといへとも実ハ名ばかりにて其中道に志なき事ハ二百載の下風列の聲威をかりて世俗に投し時名を収んとする。いとさもしき耕なり。

今其師といはるゝ者の殊に翔ましく文作するを聞くに、何よりも世に大名し道を修する程朱を排し、文を論ずる事ハ韓欧を貶し、自ら牛耳を執りて一世人なきがごとくにいひなしける者攀龍世貞らの余に驕りをよく其伝を継するとかや。

寸識人をして後に

後数回ありて　然るに事今世しハ、翁が常日文章の事あるに譲無き書術にハ教ありて取りてハそれぞれにつき請益なき事なれば、古語先王の書ハ、我心とも月々に読ゆく常に此筋にて指示ハ、今段く文章の事あるに懐ゆかず、よき人の道を知るものなくハや多くハなしハ、翁そまへハむかしより往き事なくハ大凡書を多読すま

しといへども。たとひ千巻万巻の書読ぬとも其の書にこと
を精しくせざれバ。還て読まざるにおなじ。何の益を
か得んや。寸鉄人を殺すといへる。一寸の鉄なれども能人を殺
すごとく。長刀を具したりといへども用にたゝざるがごとし
むかし東坡自ら西漢書をよまれしに。事ごとに治道人物地理
官制兵戦貨財の類一遍ごとに一事をもとめられしは。数
遍を経て事々精覈なりしとぞ。虞邵庵をはじめ今
教く讀書の良法とし。世にも今此法を志さぬ人なく。文理を得
遷固の史をも文章の為とよまん中にも。義理事実を貪らせん。
又文章の一筋をとりてよむべし。右もまた当

一 かなの文字八字を精しくすべし。事を成えたり。そのうへにつゞきて翁曰ク始
作法を定め得たるの一に字例。文字を用る此例なり。かの八葉乃
続かれるのおもし。参差同しく補なふも其用ひ方なり。其連
同しく浮なるもその用ひ方なり。文字も亦其のなり。勉字勢
字同しく往とむるなどをも其もちひ異なり。怯字敬字同し
くはしく志むるなどても其もちひ方なり。すべて家語同例の字皆
其同実を知すべし。同例なれども其同実を弁せずしては
みな此類を志るべし。象棋をさすの如し。必用の経なれ
ば其の多く他と異なる文字も一字ある八一字の絵なり。焉矣乎
哉等の助字は其く同文字やうなきもあまたあり。しかれどもひ

なく疑似するものあきハ、とかく古人の用ひし例をひろく考へ、彼此をくらべしらべて是非をさだむべし。其こと語類字かくれあるて成語となれバ、其類一ならず。次ハ其に似たる語あり。合成より成る語あり。人の性次に係る語あり。或ハ措置に係る語あり。古雅の語あり。法喩の語あり。其外あげていひつくすべからず。必しも其旅をなすことの語なそあらず。古の成語を多く記して、其中より轉化しもせよ。おのづから雅なりて俗ならず。連ねて述ぶる時ハ五言六鋪叙語を補く章段をなさバ、あるは雅分類聚のものあり。文互錯綜の所あり。ことを殺るの處、言を布の贍そうしきを用ひるべし。其中にて體裁鋪叙によりて首尾をかなへて起端あり

承接あり。轉折あり。收結あり。文勢の抑揚頓挫儆貫の序段あるをよく分ち、右の法をそてよめバ、訓読とよむとわかれ。加之歳月の功を積めバ、おのづから自得する所あらん。筆をおろし文をるよ。用字を誤られ、造語よいやしからバ、鋪叙体ありて體裁正しく言を多くて道を論ずるの助けとするに足らん。しかし俗に文字をしらくわざれ、観美を浩らかに事をとく学問の事とせバ、浮華無實の甚しきといふも、この文雅風流を道とすればよろしかるべし。よく異なるべき者らハ今かくのごとくするも人の狹郭に納るるにて、八爲の其罪なりとせバ。今世の学者多く穿鑿により實行をんとせバ、多く文辞に馳騁して虚誉を求めざらしむべし。務るに

師儒ある者なきを痛く懲(こら)さるゝも打あてらるゝとも。況や道ハ文
雅風流のかの遊ぶ事くさなんとする。誰かハかれひ率(ひき)ゐくさきてさらば
さるべき日之ハ道を語にあれバ。文章にあれバ。語にあれバ。そ
文辞ハさらにかくにあれバ語にあれども。いもけれ夫子
の文章ハ。乃徳の見ゆるの威儀(ぎ)文辞にあらハるゝをいへり。今の
よ文辞をさして道とする事。玉帛(ちく)をさして禮とし。鐘鼓(しようこ)をさして
楽(グ)とするに同じ。されバ孔子も禮云(ト)禮云玉帛(ギヨクハク)云乎(ヲモ)哉(えんや)。楽(ト)云
楽云鐘鼓(ヲモ)云乎哉との給ひし。翁も聖人をまね(まね)似て文といひ章と
いふ文辞をもしも、いかにといへるにやと思ひ侍る。
言ハ身の文

飾かくして思ふまゝ口より出することなくいへバ言とし。言の連続(れんぞく)まて
あることくいへバ語とし。語の採択(さいたく)をかざりなすを辞とし。そこまで
文字に記されバ。それハ文辞となれり。まこと言語文辞同じこと也。
多し後世文字其辞を文辞といふなれバ起して。文辞に限りて文章を
いふなり。古文を守りて去れバ。身にかなふて文章其ハおのづから善をあらはす語よ
あらはす文辞にして其辞事の事とあらハる。古の慎(しん)言の訓一かし
て多くあれ孔子も云(いは)く君子其枢機(すうき)栄辱(えいぢよく)のもとの給ひ。子貢
も君子の一言にて知とし。一言にて不知とすといひ。南容ハ白
主を三復しけれバ是よりて、いまだ身其文章ハ云給ふによりてなき
ハなし。顔之推(しすい)の言ハ身之文也といひしハ其ゆゑなく甚(はなはだ)はわざ

つくられといふとも。世に儒者と称する人多くハ、ねに諍気して鄙倍
をきらふ事を专らとし、或ハ大言を務とし。戯謔を好み、或ハ女色
を務とし。貨利を議し。甚しきに至てハ委巷の鄙語をまじへ。奴隷の語
に似たり。文雅風流安にかあらわれむや。然るに詩を作り文を著し
し。琴を鼓し筆を弄して古人の文雅風流となし、なかんづく賞翫
還珠の類なるも。夫れ文雅風流古人に似たりとも優孟が
孫叔敖を学ぶの如し。況や大きに似ざるものをや。猿の王氏孫
叔敖とすべき。唐土の事はいふまで。兵家山鹿の仰しが。世に士の
金銭の事を口にも出さず、いやしきことをいふて。大きなる僻事
なり。金銭はなくて叶はぬものにして、いとも大切なる物なるを

をいやしめ粗末にすべきものにあらざるなり。諸侯よりも金銭を賜はる事ハ決して
戴きてくださしおかるけれども、心に思ひ浮べ申すことハ。公儀より六
兵衛利害の貪欲なるをいふにやあらん。士の道をさとさん為なれバ
なるべし。八十の士ハ義理よりも大切なるものなり。甚だしきハ金をも大切と
し。金銭ハ文武の治乱にも此二つとも大切なる物なれバ。何れもまさり劣りハ
生死の場に金銭の事まで論するハ。其義理といふものに至る道を迷ふ事
甚だし。よりて貪生貪利の事をバ。金に至るまでよしといふとも
はなはだしきハ士たる者にあるまじき利欲にまよひ。貪りて利欲を
いふも。金銭の欲よりおこれば。身の為を思ひ内にも清き利欲なからむ。さ
れバ金ハ金銭よりも大切なれど、ものに迷ふよりも、勝手を知りて、いふべし。

今といふべからず務むるに於ては事をあらためてすとも義に從ふべし。
塵芥(ぢんかい)のごときも惜んずれば古の道なれども、いかんや金銀に於てをや。
されば古人のいへる事あり、常に其身を保ちしかれども、金銀も
必ず貴(たつと)し。貴ければ恐るゝものなし。されど人のさまに金銀
金銀をかしこくなし、つねにおもひはかれども、いふべし。商賈(あきうど)なりとも
なかるべし。古のもろこしの事なれども、むかし小説の書にも見えたり。
唐の柳公権(えん)の家に久しく仕へし婢(ひ)ありしが、柳家を出て
揚巨源(やうきよげん)の家に仕へけり。夫人(ふじん)鏡(きやう)を買ひて自ら牙僧(ざくわい)をして
價(あたひ)の高下を議せしむるを見て、傍に驚(きやう)喜(き)を叫びて揚家を謝し
去りければ、其後人に問ひ問はれけるに、柳家にありし時、終に内子(ないし)

此物をあきなひ物の價を同じうする事をきかざれば、此の家には夫人
牙僧と價を議せしむるを見て、ふしぎに思ひて驚きて
疾を得るとぞ。いふべしとなり。柳氏は唐の世族(せいぞく)にて家風
いさぎよく、新進(しんしん)の家とは格別(かくべつ)の事なりけれども、中唐の
後なれば、はやしきことにてかく祇してけれども、かならず
我朝は君子國と称せられて、東夷の中よりも風俗淳素(じゅんそ)
にして、便利に於ては義理を宗としてありける
ども、おのづから廉恥(れんち)の風をうしなはざりけれ、然るに世
になりて、風俗大きに変(へん)じて、古くる者も金銀のみ
常に所為をなして、あらゆる倹素(けんそ)質直(ちよく)なく、いたづらに驕奢(きやうしや)

ことくさきはまくもしつかなからりけれ。かれ老人の物かたりに。胡
鮮陳（きんぢん）の時月根室侍中たる郭使にゆきし家貧しくて支
度かなひがたし。ある時八之好新堂といふ者あり如水よりて銀百枚
をかりければ約して後新堂同じくして其のかりし一礼を
いひしに如水対面してさきほどおりて人をよびてさき[illegible]
鯛を二枚におろして、甚骨をとりて今吸物にしてあせくいふを
客人聞くよろこびしければ酒をもすゝめて之好諸をもてなして
立し去りては如水家約まりぬれるにやくそかなし。合力するなよ
ありしとてやくそかなしてやりぬ。館舎の事まで
さとひし鯛をまてまこちられ。去つもあるまじくいふべし。

よしき事とは思ひよりたさく朋友多難に落ち中にて銀百枚をかしし
急しくもおもひしを。第一の事ゆへも當時代の士の風俗侈素貧
虚にして大切の義を忘れん事潔白なればこそとらるゝ。気
わつき時の事をおもひて士なれはよくも年わつき人なれは本の主
段（だん）の事共かゝりにも不はゝ、それ女房の給をきせても赤面する人も
あるなかにも大きなる右衛門（てんゑもん）殿軍の事を聞くよりて、主君一の奉
公武士の心懸なるとて義論（せんぎ）してし。当代わつき人の若き合をきて
多くは損得（そんとく）の上はなし。又女の家具（ちよう）の事をたてに作て
あるは一生の内をとせさるにもかけず。皆人六十をすぎて後とは格別の
風にて奴、又甚しかるは加賀の地家なども云ひし士なり。

其子弟人といひし者は翁が七友なりき其父は宋女の子なりし
いひしやうく。八とある多く具とする事世にあれ事なりきと
も汝等必ずしかれ。かゝる事はけて彼によりあれなし。すこし加へ勝
く我に得あれば。碁象戯に勝ちたりやうちひとへせなの
なりことと備へしまりくなりく免かれ。當世の人は品をかゝらく
かくしつゝ名をとる猪れ。又多事きあると云ふしく買はじ。それも
おしむてるなるべし。いふべ高賈みちぬりて古今着のもやし
く、いかよしきことなりき。又先生新井筑後守のいひしを見へ給る。
人の得らるといふべくたのもしき人とさへいふべしきまでなりき。今諸子
さへもさへ八生へ八。今中さいふべく是をかゝりしと申まゝなりき。其れは臆

病の唐名とききぬべし。停構のことき
文廟へもやとけれとく語りし。ひとり理あれまでなりし一もとに
古を一名々と申さんとおかけく。利欲臆病好色それ此筋のことを
いはれ。ほどに無擇言をてそあらめかつてゆかれたるいふべしまたかの世儒
の好む文雅風流もあつまるとやらん道に中難儀といふべき遠かるべし。
今の文人の云ふ行をすてく徒に文辞のみ事とせんとやして。聖賢の道は
これあることを見てまこその所好に僻して。自らそのまゝ背く事を
あらさぬなりき。あらしむる学をもてまた後生を誤るもの多き
けうし後生。詩にいはく。誰生厲階。至今為梗。といへるの謂なるべし。

一日の澤

冬もやう／＼ふかくなりぬれば。荒ちかぜのはげしきすさまじく。
雪もちら／＼みぞれしぐるゝ程に。日もすでにくれにて。烏
羽玉の闇さへいとゞものすごく。かくて我も物がなしく。ひとりさむ
所にまよひあるきて。寒さはいとゞ骨にしみ。其夜のやどりもなければ。あまりに
鐘の音も身にしみて。鶏の声もせず。やがて夜もあけなんとするや
うよ見やれば。いづくともなく。窓の内より灯のかげの見えければ家
まぢかくよりて。戸をあけさせんと思ひしに。雪
いたくふりて。庭の草木もみなうづもれて。春
まで見えず。よもの山々の梢も白妙にうづもれて。人間世界さる
ごとくに見えて。白妙のうへにをしもおくらぬ

池のおもてに氷して。さながら鏡のごとく。彼の
うきはしのうへに。さく花のいろも。さくもんあらん
友もなく。ひとり心の中に思ひし折ふし。何も同じ人のごとく
ありし文を東ねて。みな見開きたまひしかば
待ちかねし人の御文なれば。うれしさのあまり
あくがれ待ちわびし。かきけるよし。かの文の
かゝる御心ざしを。わすれがたき人の。ふかき
文をとりて。心のうちにおもひし。口惜き事と
一筆いだすべき事とて。思ひそめし
心をあかし。かく気をつけてありしを。すなはち

まなくいらみやせんとおもひしおりに。使者はしまいりて申し
まうさく翁へ
それは錦にては。ほらさてしすきのなかめもちならさく。かと。おやさき
まけれは、かきくしさくしくてそ乱とくなすことしもくらし。侍れ。
思ふなら、これおたづねくおてまうのりし。そこまかりて。御代あると思ふ
をはりてまうせ。しからはわかくして、その同しまいれはつよかりて門を
出てきたまひしき翁はしかへ人しておはげさん。かの文を見せし、人例の
人々は、侍衛のまいらせ。形のおもてを役げして、翁ゝまいし
くさむき志まして。これは御出。かゝみに綿でおもひしに。酒機めく
出し。それに宸翰もみれ詩を鈔めく。清談いとこほゝゞせし。

翁

あるしすみれの中には。なゆきのは。そゝきわたくに。松をうめや
君をまつる事を見くにうら侍らんは。これ、ならささむれのとめをくわ
あそんで、かまひ侍しくよとも。さのやそちおもをこしまむとを。
戯ていまくはしくも程を残れは。宸翰の余がるこそ。翁のもの
歌あくてやはおもしろきとく。翁は余情を校けしは、翁ゝやとも
むらしき雪月花の折にあひゝそや。詩歌思ひのまゝもゆし。今は
花ちりまて甚もさかうえれ。詩も久しくすてゝ例も緑は、泥
すくいひおそき事も書れさまで後に無の為志をかく侍ら
また、いうてはなもせしてそのみかつく寿に茶して。

家住駿臺下門臨萬里流隱雲平野樹棹雪遠江舟
吾老愧安道客來皆子猷草堂偏閑寂喜共故人遊
とぞよみ給ひし。家ハ地高くして長流に俯しけれバ門をすぐるの趣に似
すゐ給へるに今此詩にも門ハ臨萬里流と云れたるぞよまちかくは
ゆゑる。云業侍らで一句好わかれやうに思ひをりくれば、
韋蘇州が野渡無人舟自横といひし類なるべし。さるは詩に
祖とし泥くへる人なりけるに、古のたく篤実なる人にて
多く詩を好まねも理よりくいひをかしがの事にて、詩をゆるし
中々やさしくもあるべし。常此云傳よいくせんおかしさねやしるをこれへき
事也。くさるハ忽ちも一首綴せらるを此へとく筆をとって人

冬天衝雪到君家此日倚欄眺望賒兩岸水寒如夾鏡
千林樹合似開花
又和して
天從雪後海寰新積素凝華光入春清白由来誰相
似草堂高臥是何人
又和して
欲向駿臺臥雪時行吟招隱太沖詩古人高義今何在
此地無君誰共期
又和として前の翁の詩の韻を和して
高堂幽僻地積雪晴長流歸騎迷来路漁人滞去舟

行藏論古道。經濟問嘉猷。寄語世間客。誰知塵外遊。

そうまでの人を送りて唱和しけれバ、かくて酒酣にまかれ、猶よ翁も今すこし舞ひ給へとてのまんやしければ、その座中に世まれなら、散楽の謡よよき人わざまりしまゝ、翁甚人に一曲とすゝめしかバ、肩上の笠をつゝ影の月をとりてうけ、擔ひの声にてよ不香のふきとく折りくやしうちわしけれども、みなもつきなくうかれければ、翁おきてわかよくらをて忍びよるとき、山家雪中の意気をこんなるしまよるの詩少く便りよ録く。

六出苍理三徑平。忽聞白雪入歌聲。市中縣酒酒家近。堂上開書書帙清。玉樹玲瓏四隣合。銀沙的皪一川明。

棲何滅山陰興。莫厭留談到日傾。

八翁諸客にいひけれバ、律詩ハ文字のうちひゆうてぞ要有く、余りひきまへ給ひくも相應するとも相應せぬともあり、又一字よく景趣をますれども意味なきとあり、自ら此詩のやうなるにゆくゝ、うらよゆゑも、さばかく趣をこそかやしけれ、詩の一句の手字かなるへうらし雪ゆかしして三徑のまさるもなくなれるよゆゑ埋ミし給ふくも此二句の入字字眼となれて覚し、法戻の題と白雪の曲よにかよふの事此詩にもかなり、要は雪の気わたりかくいけれど句の合ふ字中にて雪ふかくほ待の樹の朝とりよやうへ銭中みくいけ六句の明字をよく雪を銀沙よ比し的皪の明字的實みく力わ加へりよ益くい

ハ詩をよむにハつけられたる字をおくゆゑ也。然して律詩ハ韻字が定まりてある
他の字を其字にかへる事ならぬゆゑ也。世間の詩を作る者。一首を
作るにハ韻によるほどに。其韻をさがしゆく事なくてハかなハぬ。されバ
韻に苦しむと申す事あり。又ハ韻字ありといふ事。其韻に相通の字ありて。其一
句をすへることもなく。又ハ其韻をすてて。他韻ありて作られる事も
あるよし。唐詩の韻ハ甚少しくて用ゐがたし。是唐詩を学ぶ
ものの心得なり。思過半ならんと申されし詩の会議ハ是に
てもよし。今此会にてハ面白くして。子貢ハ大蜡の
会に参りて楽しき事を問はれしに。一郷の人
皆酔て狂するがごとし。何の楽しき事をも見ずと申されけれ

バ孔子申されしハ。百日の蜡一日の沢。爾の知る所にあらずと仰られし
也。家語にハ見へたる事なり。民ハ四時稼穡を勤めて。歳終に一日飲
酒宴楽して。百日の労を忘る。是其の遺沢なり。一民の心を
以て勤労に張して。相ともに其酒に楽しむを弛くハ。君子も同
じく楽しむなるべきを。子貢ハおもひもよらぬやうに見しゆへの詩な
り。然ば孔子ハ張る弛るを兼ねる故。飲酒宴楽して。一日の休
息を楽しむを知る事なり。然るに時も蜡の日にあらず。今日
の会ハ。すでに一日の澤にもあらず。我等ごときハ民の如く
稼穡を勤めずとも。各学問を心がけ。忠信を修め。仁義
の道を世に弘めて。風教を助るやうにと志すべきハ勿論なり

澤に答揚して。不報の報とハ為し。仁の必しも官にあらず職に
位すべきに。国家に報すといはんや。
も物人を移ん
翁弱冠のころ從ふにあらん左傳を読く。叔向の母此丈有尤物
足以移人苟非徳義則必有禍といふにおもく。竦然としるく
戒懼のこゝろまでにきゝて亀鑑の名言といふもし。さきハ徳義
の移人て。伯夷の清の如く。柳下恵の和のごとし一たび世の間の
ちかきにおいてまことて伯夷の風をきく者ハ。頑夫も廉に懦
夫も志を立ることなり。柳下恵の風をきくものハ。鄙夫も寛
薄夫も敦し。人を移するにあらんや。甚ねといへく。舜の韶孔子此

聖とたゆの間此をお西し。孔子韶をきく給ふこと三月肉味を志るゝに
至る。七十子號のまで親炙して其徳に化せる。又人を移すの
まことにいふもし。其外忠臣孝子高潔義烈の行此人を感
慕せしむるもまる其類わのふ。おのそ徳義の類そそくに移せしは
きはよし。いし。き移せしは小しきまし。仁の此禍にわらんにそし徳義
のなきにあらうして人を移するは儀狄の酒南威の色そいふに
及ぶぞ。其外錦繍珠玉珍禽奇獣にいはまで。人を移するに至る
をしるもの此ねたてのみに移さるゝ者ハ。大なるは必身を亡し
玉を滅ぼし。小なるは必名を辱しめ咎を招く。古今歴々として
挙べし。詩文書机にいたるまで。儒者がすまにあらくべし

て文翰をこのみ、かの李杜摩詰の詩、韓欧東坡の文に至
る書のあるかぎりをこそ、それも文字古今にわたり、いへども名一代の人と稱せ
らるるものあり。されども亦かの道義のうへにおいてはなほ
古人に及ばず。詩賦をよくし、文章を好み、其人多くつひに身を投じ、かの事を
すてゝおのれ寝處せざれば、やすからず。実によく言ひて、云々の雄偉
を尚ぶに過ぎず。其文は馳せて雕鏤の巧に衒ふ。身に
おいて仁の益、あらん道におゐて得る所の事あらん。
徒に玩物喪志といふもの、好書をもつて最も下れる志
なり。唐の太宗は明なりしが、遺命して蘭亭の帖を棺に
入れし、自ら倦を知らず、古の好人なれど詩賦文章のために喪ふ。

ならずして、詩賦文章文字は、かの好人を止むべし。聲色
の好人ならず。必ずしも有德といふべきにもあらず。人をして虚
文に走らせ、実用を忘れしむ。道に害ありといふべし。されば老泉
の高遠を誇する志をもて、文章を論じて、おほく許しがたし。学者
詩賦文章においては、醫者の毒薬を用ふるがごとくすべし。
其毒をもて治病に用ゆべく、人を殺すにいたらしむべからず。
詩懐に至りては、文章の辞達に至るべく、好まざるもよし。されど
とかく好まば、必ず其毒に中るべし。其まゝ詩賦文章も一種の
事にして、今は遠大の材となさんとせば、必ず歳月を費して
学問の功を妨ぐべし。韓愈の文を学びし事を自ら叙る

とるんうよ處若忘。行若遺。儼乎其若思。茫乎其若迷と
いへり。翁これをおゝく嘆息して曰く。韓愈ハ おそる
べきをしる。嗚呼韓愈ハ材をとくしくも道学よ困ずかくの
ごとくせバ。聖賢よいたるも難からんきよわしれ。其その学至
文辞の間よそひやすく。已ま実将此論を見ることを得よ居恒
飲博過従の楽を貪り。瀬列よ流されし時々。大顛よ
動かされてし乎。已ま甚根源よ多りねれバ。文章此ゆるよ謬よ
形りてなやて行るもなっけても。程朱此学の詩文を嫌ひ
とハよめらうもおすうてき詩文を禁絶せよハ中もわら
れ。詩文の疎人なうも我おそまうかよ。至やく程朱道へのあを

慮る事の遠きを諸君よく思ひ知るべし。六芸の外日觴詠
のわざひよ陪従し。又翁此剞劂をつらぬ六。郷よ楽く浅せんとも
中寒し。詩よいはく好楽無荒。良士瞿々。今日此謂なくてそ也。
娯楽とも此信なく学問ひそしかぞく。庶幾も宴安の鴆毒を懐よ
ゆそあるよしくハ。さこれ翁の物中くはらく各恭謝の體よ
見るべし。此冬日のかりやく往すくあやまこのまハずよかすくし。六法
ともよハ翁よつよみからひくよの至げれバ。一人門を出るなく。
暮下駿臺雪満蹊。漫々平白失東西。一條正路依然在。
知我同行酔不迷。
かく自詠しけるを。ついでよて吟賞して。此詩有心かりやといふ

すゑして。吾已に家路におもむきぬ。

　年はくれけり

朔風厳寒にして川辺に冽く。ゆきをもよほすなりけるは。

積雪も去年よりはふかく。後日を待せんとて草庵におもむけり。今をと

おもひくれ給ふやうなれば。例の人は翁の起居を問ひもなくありけるに。

翁もひとりしづかに年の暮をまちて世の中をさりて、そのはかなく

しかじかとや去て、翁は市朝に住すうち、翁の草堂にありしとぞ。あまる

すまゐ侍し。蕭条たる環堵の中に。何とはなく病に臥して月を

おくりて待ほどに六月の末より年比言ふるも見えず。終に宴をへて冥月の

遊をもなしかねられたく、出しけるに、年を経てまかりし甲斐も

なからむかしく、不足なく我老年積りて。此ほど朽果しを。今

又悔しくもあれまほしくおもひて

かくおもひて身のほどに老ぬらん。此おもひなまじ

かくといふ古歌をおもひ出して。年よりても忘れぬばかりいへるとぞ。

況や廟にも、かの衛武公。行年九十あまりにして。猶箴を儆於國にていはく、苟在朝者無謂我老耄而舍我。必恭恪於朝夕以交戒我

かく抑戒の詩を作りて。自儆給ひしに。今翁このとしに

と云ふも、はるかに先王の年に及ばれ。今ふたたび期頤のよはひを享く。

月日に種ますくおほくして、況や孔子に及びて非門に

遊びまなぶも。今に呈下の阿蒙なく。しらぬには。かくしる事もなく。

多年此れ教育をもちゐるといへどもしるしなし。材質の庸下なるゆゑにこそ
中なからず学文此つゐにあさらざるよしを此翁の云しちからもおよばじく。
汗顔に及ぬまでくやみしに此若輩にはさとしく。此一両日をさとに
道にすゝむほどなる事もあらず。なれば此後も相ともに勉強
して日夜進益をとげんとて我なげき志つて道にあらざれば
やゝ一ヶ年すぎ此効を得たるべきにたとへ翁の策励を作きゝしが翁
聞くてよ奇特なるかな学びはじめよりさもあるべくおもふなり。さ
て翁の先名謝すべきは衛の武公の事をとて翁がはじめたる
こそやかて佩服して忘るゝことなく学びの道をとをらん。武公此賢
なるが企及べきにあらねども其老くる自儆群きし八十あまり年

老たる人此師法とすべき事なりと。翁が曰く春秋列国の人物を
論じていはゞ、春秋の時衛にはおほく二人の大賢あり。諸侯
には衛の武公、大夫には蘧伯玉此二賢なり。道をこのむ事真に学
を好むと篤し。皆聖人の流なり。伯玉は寡過を欲すとして
未能ざし五十にして四十九年の非をしるといひて年と化
すといへり。武公は自儆に我過を聞ん事を求む。蒙瞍相比
て自治誠切なる事一にあらず。孔門七十子の中に求むるも
顔曽の外には多く得べからず。ましたく列国君大夫の賢
といふともおよぶべきにあらず。其の成徳の篤實光輝あつて
いまに今も称人をして千載の下に興起せしむ。これなれば翁老

なけれども。今よりして謹く此君の従規をまもりて。終生を終む
ときは。おのづから此君のおしへにかなひ。春秋ふるにしたがひ材力もたくはへ
懈怠なくして日々に学業に進まば。やがて古人にも及ぶべき程にも成
日を恃むまじきなり。材力を全くするにいたらば。たとひ孳々汲々と
して勉々不息にあらずとも。悠々として日を渉り。一旦
年老齢傾く後。日々の懈を思ひても。今は悔ともかなはず。尭舜
なれども即今汝が才性にてはゆくさきも。六十古稀にも少壮不努
力。老大徒傷悲といへり。陶淵明も。盛年不重来。一日難
再晨。及時当勉励。歳月不待人といへり。古人も此感懐を詩
しますべくもしこれらの詩句時々吟詠して。勇進の志を振

起すべし。又世に伝る朱文公の勧学の文に。
勿謂今日不学而有来日。勿謂今年不学而有来年。日
月逝矣歳不我延。嗚呼老矣是誰之愆。
此文本集に見えず。朱子家訓并自集の文にもあらざれば。朱
子の作にあらず。又は後人の擬作にて。名を朱子に託するなるべけれども
も。よしや誰の作にもせよ。言葉にして意も明白なれば。おもしろきなれ
幼く自警とするによろし。何事も人の常に心をとめてすれば
陶侃が語にも。大禹聖人乃惜寸陰。至於衆人当惜分陰。豈
可逸遊荒廃。生無益於時。死無聞於後。是自棄也といへ
り。学を立て志をのべとするも。専ら淵明の詩も最祖

以来此家法によつてと思ひ侍る。およそ人と生まれて学問に志あらんには
きはめて幼き時に道を聞て後に学ぶる事なく本来を迎ふ行果ハ〳〵とに
備ふるべき事なるべきさ。是ハ諸君も此陰佩に熊をとりて自ら
激昂して日夜勤勉せらるべし。但学問に精進をよく致して
いつとも又急迫なれば手をこれ侍るとも一生おろそかに離れぬ事
なく然ハ急迫みして求めんとすれ共多く懈惰を戒めて常に
聖賢の書に優遊涵泳せられ是は久しくしておのづから進歩あれ
るべし。爺むかし加賀にありし時。士族の中に紹鷗利休の風流を慕
ひ。茶湯をなむものあるに江戸へ下る時道中にも茶道具をもたせて。途
旅なりとも釜をかけ炭をおきて楽しみにけるを同行の人見ては、

このあすけハとかく旅中なくてもやめよかしといへば。其人いふやう旅中
此日やとく一生の内にあらハこそ。是も一生此日かぎりの内なる事は
なる茶湯をする日にあらずといふべからず。家にあれど旅にあれど異なる
ことなく。其後もあざけりを言ふ此道に志深き。此人の茶湯を
言ふも。まことなるかなと思ひ侍るに。須臾も離るべからざる事は
一生の間たえず日々にあらきさらぬなく。おもふさきるさらぬ此道なれ
ばよわくさらぬなし。おもふ事も急迫にしてもとめ侍るに。僅く
少しの時にて有得かたし。皮膚の間にてもそのいのちか。甚哉を噬て
渡味に飫ことあるべき。況や急迫なる者ハ久しき事をなしがたし。
いまた日新に此時に及びてしやう〳〵倦怠するに成りぬべし。

ことにしく、学問を勉励せよとなり。かく急にして迫切なる者
は、たゞ義理を涵泳を貴ふ。緩にして懈弛なる者は戒む。迫切
なるも懈弛なるも、学者進脩の途におゐて、緩急相得ざる背
くところなれば、よくよく心得べし。程子の曰く、志道懇切固是誠意。若迫
切不中理則反為不誠。又曰人謂要力行亦只是浅近語。這一
點意氣能得幾時了。諸君程子の言を見よ。翁の説あやまれり
といふべからず。

壬子試筆の詞 附

日月逝ることに。白駒の隙過るごとく。衰病日に侵して。黄金の
術なからんとせしさまに、太馬のよそひ見るにつけても思ひさぐらし

こゝに庵しける老の波よせ来て、おもへば七十あまりの春をむ
かへぬ。わけて去年の秋より身に痿痺を得て、今も猶
起居もやすからず。昔の董生が学に専なりしとも
ことせ春の園を窺ふことも、かなはぬは、園の中なる梢
につたなき鶯の音を添ふ。梅がゝの匂ひ梅が枝に宿る
むかしを志のぶよすがもなく、つれづれと暮しつゝ
しばしの学びの窓に年を経る甲斐もなく、程朱の道に志さ
ぬ、鄒魯の風を慕ひて、韓欧の文を学ぶ如く、耶鄲の
歩を学ぶ子に等しく、老の繰言も尽ぬべし。さるも多くの年月経
ぬれば、世の流れに、かの青柳を老なるに、盛衰栄枯常に移

うなる及ぶや、ちん況とやいちん。故に富貴に淫らなく
禍福に迷ふ。纏ひあるしと云ふれなおゐのあふる事あるべき世に
然て吾聖人の建給ふ三綱五常の道乃ち天地と並び行ふ。古今
の鑑となすべきものは、かられおとあらんや人として行ふべき宗
なるべき此道なく。然れども儒教世に行はるるまでさまたげしよりて
人々義理なくして。利欲にさとくなる程に、五常の道も廃れまて
風俗日々に衰へてゆく事なりけるに、儒士いよ／＼嘆き憂ひて
一代の風教を維持せんとするも、口の力をもつてせんとするはあるが如く
に蚍蜉の樹を撼かし。精衛の海を填むに似るべし。さはいへど
世を憂ひ民を救はんとするも吾儒分内の事なれば。己を度外に

置きさまもあらんとても、かかる大事、世に老荘宿儒と称する人の中にて
実況を肆にし。又は左道を雑へて、仁義五常の根源を本とせず
にするものやらんは、多く勢て新奇を競ひ、俗耳を悦ばしめ
時好に投ずるなれべし。こと口惜きことなりと、古人の言もゆゑある阿
世曲学なりとさしつかへたまふべし。されば人々こころもあらば
従風俗を背きにおこたらず、なほ好みも口の戒にもとる事なく
仁義の道をまもりて。古聖の模範を守りて思ふべき貴
て儒となるべき志は、ちみとき長き志を見るにおよばぬまで乃
ちとして、人々皆己の志身の徳を万代とやいふ中に致すべく
五常の道にふかく世に云ふも、かかる貝寄たき物あるべき道なり

やゝかくかなん筆をとりて録せられけるなりし。
しかるも、かはりてゆかしき事におもひける人の道をかなしく。
此雑話は去享保辛亥の秋より冬にわたりて一緒生と語りし
雑話を書集めおかれしが、壬子の春より筆を起して秋に至り
稿を脱しぬ。されどもあやしき筵のもとにかなしくて櫃にて
吾黨にすゝめて伝写し、やゝ浅学の才を省みず万一此助ともならんか
しとおもひて試に毫をとりて末に附して終りとす。後学よ
ことに臣窮によりおのがかたをあらはしけれとぞ。
享保壬子のとし冬十月　鳩巣老人

駿臺雑話巻五畢

三都
發行
書肆

江戸日本橋南壹丁目　須原屋茂兵衛
同　淺草茅町二丁目　同　伊八
同　日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
同　中橋廣小路町　西宮彌兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
同　下谷池端仲町　岡村庄助
同　本銀町二丁目　永樂屋東四郎
同　十軒店　英屋大助
京都三條通御幸町角　吉野屋仁兵衛
尾州名古屋本町通　菱屋藤兵衛
大阪心齋橋通北久太良町　河内屋喜兵衛
同　仝通本町北エ入　同　和助
行板

国立公文書館
National Archives of Japan